

井上美鈴 低出生体重児の母親に関する臨床心理学的研究

——学位請求論文——

I 論文要旨

井上美鈴

本論文では、新生児集中治療室 (Neonatal intensive care unit; 以下NICUとする) に入院中の低出生体重児 (Low birth weight infant; 以下LBWIとする) の母親を、臨床家がいかに支援するかの示唆を得るために、不安に関しての調査研究、事例研究を行った。

第一章 「問題と目的」

本章では、これまでの文献から、産褥期の母親の情緒の特徴、母親が達成すべき課題について、LBWIの母親と正常成熟児 (Normal infant; 以下NIとする) の母親を比較した。その中で、LBWIの母親は、NIの母親よりも困難な状況に置かれていることが理解され、心理的支援の重要性が理解された。そこで、この時期のLBWIの母

親への介入研究を概観してみると、情緒的支援が重要であるとの見解が多く、介入研究からも心理的支援の必要が強調された。

次に、母親を理解するためには、どのような視点が必要かを、これまでの研究者の知見から整理し、どの研究者も母親の情緒的側面に注目していたことが明らかとなった。筆者は、その中でも、NICUでの臨床で問題となりやすいという理由から、特に不安に焦点付けた。

このような不安を考慮に入れた心理的支援には、二つの意義があると考えられた。すなわち、(1)母親の情緒的混乱を支え、母親の精神衛生を向上させるという側面、そして、(2)児の心理社会的発達を支えるという側面である。つまり、産褥期の不安に焦点付けた母親支援は、母親の精神衛生を向上させるだけでなく、母親が児との関係性を育み、そして児の心理社会的発達の歪みを予防することに繋がるのである。

しかしながら、これまで産褥期の母親の不安研究は、不安が抑うつの一部として捉えられてきたため、抑うつの研究ほど関心が集まってこなかった。これに対して、近年、産褥期には抑うつよりもむしろ不安がテーマになりやすいこと、不安が抑うつの子見因子として考えられることなどが明らかとなり、注目を浴びている。

本邦においても、清水（一九九四）は「長期間わが子をNICUに委ねている親の不安にも、臨床医は対応しなければならぬ」と、その編書「不安の臨床」で産褥期の母親の不安について扱っていない点を指摘し、母親の不安への対応の必要性および課題について述べている。

これらのことを背景に、産褥期の母親の不安研究を概観してみると、NICUにおける不安は、不安の程度についての研究は認められたが、不安の内容についての実証研究は散見するのみであり、また本邦での不安研究は皆無であることが明らかとなった。

この現状を踏まえ、本論文では、NICUにおける不安変遷と不安発生機序を明らかにすることを主目的として、調査および事例研究を行うこととした。なお、本論文で扱う不安は、出産後に母親が示す、罪責感の混じった、主に児に関する不安（心配、恐怖を含む）とした。

第二章 「調査研究による低出生体重児の母親の不安の検

「――正成熟児の母親との比較――」

本章では、NICU入院中の低出生体重児の母親（六一名）の不安を、正成熟児の母親（九四名）の不安と比較検討するために、プロスペクティブな調査研究を行った。

この検討にあたってまず課題となったのは、NICUのいかなる時期に調査するかであった。これまで日齢を基準に調査する研究は認められたが、本研究では入院期間を詳細に捉えなかったため、筆者は、母親が入院中に体験する出来事に注目し、NICU入院の時期を四ステージに分けた。すなわち、ステージⅠ…出産直後、ステージⅡ…保育器内での関わり、ステージⅢ…保育器外での関わり、ステージⅣ…直接母乳授乳での関わりである。同様に、NIの母親も体験を軸に、入院期間を四つのステージで捉え、両者を比較しながら、ステージに沿って不安を整理した。主な結果は以下である。

1. LBWIの母親の不安は、NIの母親よりNICU入院期間を通して高かった。

2. 不安に影響する因子は、NIの母親が出産経験や年齢であるのに対して、LBWIの母親は児の出生体重と在胎週数であった。

3. LBWIの母親の不安内容は、分離不安を除いて、NIの母親と同じ内容（児の状況・児の発達・育児・体調・母乳・夫との関係など一二項目）が現れた。しか

しこれまで強調されていた生存への不安は一件のみしか認められなかった。

4. LBW Iの母親のステージの不安変遷は、NI Iの母親とは全く異なった様相を示した。NI Iの母親においては、ステージIでは、児の発達への不安とともに自身自身の体調への不安も現れやすいが、ステージII以降は、育児への不安が最も現れやすく、この特徴はステージIVまで持続した。一方、LBW Iの母親は、ステージIでは、自分自身に不安を向けるよりは、児の発達への不安に彩られており、ステージIIになると児の発達への不安は持続するが、児の状況への不安が一時的に収まった。さらに、ステージIIIでは、依然として児の発達への不安は持続しているが、不安が多様化し、ステージIVでは、退院を目前にして、児の発達への不安や状況への不安が高くなり、育児への不安も上昇していた。これらの変遷特徴は、児の体重や在胎週数に影響を受けていると推測した。

以上の結果から、NICUにおけるLBW Iの母親の不安特徴が理解されたが、横断研究であったこと、質問紙法であったこと、母親の体験をしたか、しないかで判断したことなどから課題が残された。そこで、次章の事例研究を行うこととした。

第三章 「事例研究による低出生体重児の母親の不安の検討」

討

本章では、調査研究から理解された不安の変遷と不安発生活動を補完する目的で、NICUでの三事例の心理臨床活動を示した。なお、この活動の際には、調査研究で整理された不安変遷特徴からの理解を援用し、活動に臨んだ。主な結果は以下である。

1. 不安内容については、調査研究で取り上げた内容に加え、母親が児と関わりを持つ際に生じる「行為への不安」が新たに認められた。しかし、「生存への不安」は現れず、表出できる不安とできない不安があること、また、母親は児の生存を前提に不安を語っていることがさらに確認され、調査研究を補完した。

2. 不安に影響する因子として、(a)児の医学的問題、(b)医師の説明、(c)児の成長、(d)母親の児への関わり、(e)出産体験の捉え方、(f)夫や家族の支援が認められた。

3. 変遷はほぼ調査研究と同じ傾向を示した。ただし本章で扱った児は重症であったことから、多少の程度の現れの違いは認められた。また、調査研究では扱うことが困難であった、不安内容の質の変化が新たに明らかとなった。すなわち、児の状況への不安は、初期には、医学的問題にまつわる不安であったのが、退院間近になると行動特性にまつわる不安に変化すること、育児

への不安は、初期には漠然とした不安であったのが、退院間近になると具体的な不安となることである。

第四章 「総合考察」

本論文は、後述するが、母親の体験の背後にある母親の表象（スターン、二〇〇〇）を想定している。この視点を持ちながら、本章では、調査・事例研究の結果を総合して、ステージの不安変遷と不安発生機序、母親理解の視点について考察した。最後に、本論文の意義と今後の課題について触れた。これまで類似の研究が認められず、比較検討が困難なために、筆者の調査・事例研究からの理解が中心となってしまうが、主な内容は以下である。

1. LBWIの母親の不安はNIの母親よりNICU入院期間を通して高く、これまでの知見をほぼ支持した。
2. LBWIの母親は、(a)児の状況への不安、(b)児の発達への不安、(c)育児への不安、(d)行為への不安が頻繁に訴えられ、これまでの知見をほぼ支持した。しかし生存への不安は現れず、母親は児の生存を前提に、不安を語っていると理解した。

3. LBWIの母親の不安に影響する因子は、(a)児の医学的問題、(b)医師の説明、(c)児の成長、(d)母親の児への関わり、(e)出産体験の捉え方、(f)夫や家族の支援であった。これらへの注目が母親支援の際に有用である。

4. LBWIの母親のステージの変遷は、NIの母親とは全く異なった様相を示した。すなわちステージIでは、母親は混乱状況にいて、自分自身に不安を向けるよりは、児の発達への不安に彩られていた。ステージIIになると児の発達への不安は持続するが、児の状況への不安は一時的に収まった。しかし児が重症だと、児の状況への不安は収まりにくかった。ステージIIIでは、依然として児の発達への不安は持続しているが、不安が多様化した。ただし児が重症であると、不安は多様化せず、発達への不安を強く抱き続けた。ステージIVでは、退院を目前にして、児の発達への不安や状況への不安が高まるが、同時に育児への不安が上昇してきた。また、不安の質の変化も認められた。例えば、状況への不安に関しては、医学的状況への不安から児の行動特性上の不安へと移り変わった。

そして、上述の結果のようなステージの不安特徴を踏まえて臨床活動を行う際の母親理解の五つの視点を示した。それは、(a)出産状況、(b)現在の児の状況、(c)主治医の説明の内容、(d)母親の児への関わり、(e)母親の特徴（自我機能の健全性）であった。

さらに、本論文の意義について、二点を挙げた。第一に、NICU入院中のLBWIの母親の不安に焦点付けた研究は本邦初、また、諸外国においても不安変遷を論じた研究

は認められず、新たな知見を示すことが可能となった点である。第二に、母親の体験を軸に整理した本研究は、体験の背後に母親の表象（スターン、二〇〇〇）を想定していることからLBWIの母親支援において、まず必要となってくる母親の心理の理解の際に有用である点である。さらにLBWIの母親にとどまらず、他の児の母親に対する、理解・心理的支援の際に応用が可能とも考えられる点である。

最後に、今後の課題として、(a)新たな研究との比較において、この時期の母親の不安について推敲すること、(b)臨床的介入を行いながら縦断研究を行うこと、(c)重症度を考慮して母親の不安変遷を検討することを挙げた。

II 審査報告

審査委員

(主査) 専修大学文学部教授 乾 吉佑

専修大学文学部教授 吉田 弘道

専修大学商学部教授 藤岡 新治

本論文は、低体重で出生したために、新生児集中治療室(Neonatal intensive care unit: 以下NICUと略す)での医療的介護を受けている新生児(low birth weight infant: 以下LBWI)の母親への支援を目的に検討された臨床心理学的な研究論文である。特に、NICUにおける母親の不安変遷と不安発生機序を、調査研究と事例研究を通して明らかにすることを目的としている。また、これらの結果を踏まえて、出生直後にNICUに入院せざるを得ない児の母親への支援モデルを構築することをめざしている。

本論文は、六章の章立てで、一章は問題と目的、二章、三章は、それぞれ調査研究と事例研究を通して、低出生体重児の母親の不安を多角的に検討している。四章は総合考察が述べられている。その他五章、六章の付録資料等からなる。四〇〇字四四〇枚に及ぶ論文である。

以下に、本論文の概略及び講評と審査報告を述べる。

〈本論文の概略〉

一章の「問題と目的」で著者は、NICUでの臨床実習から体験的に得た疑問や問題意識をもとに、一九五〇年代から現在まで五〇年間の国内外の文献を検討し、今回の研究テーマを整理し案出している。

具体的に問題を設定するに当たっては、同上の文献から、産褥期に母親の情緒の特徴、母親が達成すべき課題について、LBWIの母親と正常成熟児 (Normal Infant; 以下NI) の母親の比較を行っている。比較にあたっては、以下の四つの課題である、「産褥期のLBWIの母親に対する心理的支援の重要性」、「LBWIの母親への介入研究」、「LBWIの母親理解の視点」、「LBWIの母親のNIを通して不安研究の概略」について検討した。

以上の文献による検討から、LBWIの母親は、NIの母親より各々の課題（心理的支援、介入研究、母親理解の視点、不安研究）において、困難な状況に置かれていること、その上、LBWIの母親独自の情緒的な支援の必要性が強調されていることを見出した。しかしながら、先行研究ではLBWIの母親への情緒的な支援は重要視されるものの、具体的に臨床場面でどのような心理的支援を行うかについての研究は、数少ないものであり、特に、臨床の場

面で訴えられる不安（母親が示す心配、気遣い、心理的動揺など）への対応は、抑うつ研究に比べると極めて乏しいものであったという。海外文献でも、LBWIの母親が抱く具体的不安内容やNIとの不安比較、実証研究は少なく、一九八七年から一九八八年に数件散見されるだけであり、本邦の研究に至っては今日まではほぼ五〇年間皆無であったという。

従って、これらの文献研究と臨床の実態を検討した結果、著者は本論文の目的である母親の支援をめざし、特にNICUにおけるLBWIの母親の不安変遷と不安発生機序を明らかにする目的を着想し、NIの母親と比較しながら調査研究、事例研究を実施した。

第二章 「調査研究による低出生体重児の母親の不安の検討

— 正常成熟児の母親との比較 —

第二章では、LBWIの母親の不安を、NIの母親の不安と比較検討を行った。これらの比較調査研究を行うに先立って、まず著者が検討したのは、NICU入院のいかなる時期に調査するかであった。これまでの先行研究でLBWIとNIの母親との比較研究では、日齢を基準に調査するものがほとんどであったが、本研究では入院期間を詳細に捉えるため、著者はLBWIの母親が入院中に体験する出来事に注目し、NICU入院の時期を四つのステージに

分けて調査することを案出した。

つまり、母親が出産直後から退院までに、児の発達段階に相応して体験する母親の体験段階を四つのステージから捉えた体験段階チェックリスト (mother experience stage check list: MESCL) を作成したのである。すなわちステージⅠでは、「出産直後」での母親の体験、ステージⅡでは「保育器内での関わり」についての体験、ステージⅢでは「保育器外での関わり」について体験、ステージⅣでは、「直接母乳授乳での関わり」についての体験の四段階である。また同様に、NIの母親も体験を軸に、入院期間を四つのステージで捉え、両者を比較しながら、ステージにそって不安を整理していった。

調査対象及び調査方法は、NICUに入院中の二五〇〇グラム以下のLBWIの母親六一名に対して、母親が抱く不安心理を、日本版状態・特性不安検査法 (STAI) と自由記述を使用し、量的・質的に調査し、平均的なLBWIの母親が抱く不安の程度、その内容の経過を、NIの母親九四名と比較検討を行っている。

また、統計的手法については、二元配置の分散分析やライアン法による多重比較をMESCLの各ステージについて検討を行い、また自由記述回答はKJ法に準じた形で分析をおこなった。そのような手続を経て、LBWIとNIの母親に共通して現れた不安の共通項目とLBWIの母

親のみに現れた特徴項目を抽出した。

以上の調査手続きから得られた主な結果は、以下のとおりであった。

1. LBWIの母親の不安は、NIの母親よりNICU入院期間を通して高かった。
2. LBWIの母親の不安内容は、分離不安を除いて、NIと同じ内容 (児の状況・児の発達・育児・体調・母乳・夫との関係など) が現れた。しかしこれまで強調されていた生存への不安は一件のみしか認められなかった。
3. 不安に影響する因子は、NIの母親が出産経験や年齢であるのに対して、LBWIの母親は児の出生体重と在胎週数であった。
4. LBWIの母親の体験段階でのステージの変遷は、NIの母親とは全く異なった様相を示した。NIの母親は、ステージⅠでは、児の発達への不安とともに自身自身の体調への不安も現れやすいが、ステージⅡ以降は、育児への不安が最も現れ、この特徴はステージⅣまで持続した。一方、LBWIの母親は、ステージⅠでは、自分自身に不安を向けるよりは、児の発達への不安に彩られていた。ステージⅡになると、児の発達への不安は依然として継続して訴えられるものの、児の状況への不安が一時的に収まった。さらに、ステ

ジⅢでは、児の発達への不安は持続しているが、不安が多様化した。またステージⅣでは、退院を目前にして、児の発達への不安や状況への不安が高くなり、育児への不安も上昇していた。これらの不安変遷の特徴は、児の体重や在胎週数に影響を受けていると推測された。

第三章 「事例研究による低出生体重児の母親の不安の検討」

そして、第三章では、調査研究で理解された不安の変遷と心理発生機序を補完する目的で、NICUでの三事例のLBWIの母親への心理臨床活動が示されている。なお事例は、NICUの入院治療の場面で、臨床心理士に依頼された重症ケース三例を通して検討された。

事例の検討から理解された主な結果は以下のようであった。

1. 不安内容については、調査研究で取り上げた内容に加え、母親が児と関わりを持つ際に生じる「行為への不安」が認められた。これは従来の先行研究のレトロスペクティブな手法では検討から漏れていた知見である。
- また、先行研究でLBWIの母親の不安特性の一つとして、しばしば取り上げられる「生存への不安」は、本事例研究からは興味深いことに現れなかった。
2. 不安に影響する因子としては、(a)児の医学的問題、(b)

医師の説明、(c)児の成長、(d)母親の児への関わり、(e)出産体験の捉え方、(f)夫や家族の支援が認められた。

3. 不安変遷は、ほぼ調査研究と同じ傾向を示した。ただし本章で扱った児は重症であったことから、多少の現れの違いは認められた。また、不安内容の質の変化も明らかとなった。

第四章 「総合考察」

第四章では、調査・事例研究の結果を総合して、これまで得られた、「LBWIの母親の不安の程度」、「LBWIの母親の不安に影響する因子」、「LBWIの母親の不安の内容」、「LBWIの母親のMESCLのステージごとの不安変遷とその発生機序」についての知見を整理している。そして最後に、調査研究・事例研究を通して、心理臨床家にとって、母親の体験段階のステージごとの不安特徴を踏まえて臨床活動を行うことが、母親理解に大変有用であった点を述べ、その臨床的意義を強調し、合わせて心理的支援としての母親理解の視点を提案している。

第五章、第六章 付録

第五章の付録では、本研究の基礎となる「LBWI」の定義、児を取り巻く医療環境(NICUでの診療のあらましや医学的管理など)を含む、低出生体重児の疫学、発達の

模様、疾病そして予後について詳細な説明が述べられている。六章の付録では、調査研究に用いられたアンケート調査が付されている。

以上、論文概要を述べたが、次に本論文についての審査結果を以下に報告する。

〈審査結果〉

一、本論文の研究意義について

LBWIは増加しているが、その母親の不安について、変遷過程を整理し、不安の変遷を特定できる指標を示しながらステージとしてまとめている点、また、対応方法について事例的なかわりを通して検討し、整理した点で、本研究は、LBWIにかかわる医師、看護師、臨床心理士などにひとつの指針を示した点になり、研究意義は大きい。そして、臨床の場で個別に時間をかけてデータ収集をして、LBWIの母親の不安変遷とその発生機序について、詳細に検討した論文は、わが国を初め諸外国でも数少ない。その研究を着手したことは高く評価される。

二、各章についての講評

① 一章「問題と目的」について

先行研究を渉猟しながら目的にたどり着く方法的模索に努力のあとが見え、また、研究者としても手堅く見事である。産褥期のLBWIの母親の心理研究の概略について、

二つの課題の理解を深めることを目的に、一九五〇年代から現在まで五〇年間の国内外の文献を検討した。国内の文献を四〇編、海外文献五〇編を渉猟し、そして、第一の課題である「平均的なLBWIの母親の心理過程、特に不安心理過程の経過がいかなるものか」について、四四編の論文から、「母親の抱く不安の内容」について検討しているものが、Pederson, et al (一九八七)を含む数件であったことを突き止め、LBWIの母親を臨床的に支援するには、この母親の不安内容の詳細を研究課題とすることの必要性を抽出した。この着想と研究者としての耐久力は評価できる。

② 二章「調査研究による低出生体重児の母親の不安の検討——正常成熟児の母親との比較——」について

LBWIの母親の研究は、従来、日齢を基準に行われてきた。本研究は、NICUに入院中に母親が体験する出来事に注目し、四つのステージに分類し、各ステージにそって母親の不安などを整理し、母親間の比較を行った。LBWIの母親の場合、日齢で比較すると個人差が大きく、比較が意味を持たないことも生じる。この四つのステージで比較することにより、この問題点がある程度解決したといえよう。今後、LBWIの母親研究には、この新しい方法が取り入れられるものと思われる。

また、LBWIの母親六一名と、NIの母親九四名を対

照群として比較研究を行っているが、これだけの人数の資料を収集する作業は簡単にできることではない。このような研究資料の収集方法をみると、資料の背後には大変な時間と真摯な対応があつてなされた研究であることがうかがえる。

一方、統計的手法については、二元配置の分散分析やライアン法による多重比較を用いてステージ毎に検討し、また自由記述回答にはKJ法に準じた形で整理し、LBWIとNIの母親に共通して現れた共通項目とLBWIの母親のみに現れた特徴項目を抽出するなど手堅く処理している。

以上の評価点とともに以下の課題も本章では認められた。つまり、母親がLBWIを出産したことによる心理的動揺と不安、および、LBWIと接する際の不安と、子どもの成長への不安に関する研究でありながら、不安の測定のために用いた測定用具が、一般的な不安を測定する尺度であるSTAIであった点は、少し残念である。LBWIの母親の不安を測定する尺度を作成すること自体が、ひとつの大きな研究になる可能性があるが、本研究が、不安推移の整理と対応方法の明確化に主眼が置かれたことから、不安の測定尺度の開発までにはいたらなかったと考えられる。

③ 三章「事例研究による低出生体重児の母親の不安の検討」について

入院中のLBWIの母親事例A、B、C、の三事例のプ

ロスペクティブな臨床観察から、母親の年齢、出産経験、日齢、分娩スタイル、アプガースコアや出生体重の異なる経験を通して、その母親がMESCLステージごとに訴えてくる不安内容を適切に受け止め、対応する様子が描かれている。事例検討としても読み応えのあるもので、余裕と臨場感が感じられる。これは、不安心理特性をその状況に応じて把握し、上手に各事例の母親支援に生かしているからであろう。臨床心理学的研究の観点から見れば、本研究を通して、著者は、日頃の臨床心理学での間主観的な心理療法の学習や乳幼児観察法の成果が示されているといえう。

④ 四章「総合考察」について

総合考察は以下に述べる理由で、二章、三章の調査研究、事例研究の有意義な知見を十分に生かせず、やや平板な考察となつている点が惜しまれる。

つまり、臨床の場で個別に時間をかけてデータ収集をして、LBWIの母親の不安変遷とその発生機序について、二章、三章で詳細に検討しているにも関わらず、得られたLBWIの母親の不安特徴や内容等が十分に総合考察に生かされていない。この点について著者は、本研究成果を比較検討する先行研究が国内外に認められないので比較した総合考察が困難であったと述べているが、果たしてそうであらうか。たとえば、以下の二つの点が本研究に持ち込ま

れ認識されていたら、総合考察はより臨床心理学の観点から発展した研究所見を提出できたのではないかと残念に思うのである。

すなわち、二つの点とは、第一に事例研究における著者の関与者としての関わりが十分に吟味検討されていなかったことである。臨床場面での母親との対応においては、単に「傾聴」「情報提供」だけではない。傾聴の際の母親へのかかわりを詳しく述べる必要があったろう。著者の臨床心理士としての内面的な精神的作業や母親との深い相互関係性が認められていたと事例を読むと推論可能だが、著者は自らの関与者としての関わりについて練り上げられた論考を加えていない。したがって、中途半端な論述となり、そのために総合考察も平板となったと考えられる。第二には、著者も今後の課題として述べているように、縦断的研究や追跡調査が必要であったろう。特に、追跡調査は本研究での成果である第二章、第三章の調査研究及び事例研究された対象に対して、NICUでのケア、サポートが適切であったか否かの確認のためにも必要であった。これらの追跡研究の一部でも知ることができると、総合考察はより臨床実践に即した提案を検討できたのではないかと考えられるからである。

⑤ 第五章「付録」について

付録は、研究の過程が詳細に理解できるようにNICU

での診療やLBWIの医学的説明などが付されている。本研究の基礎となる医療状況が整理解説されており、分かり易い。

三、まとめ

以上の審査コメントで述べたものは、希望、期待、課題であって、決定的な欠陥を指摘したものではない。課程博士の場合、特に臨床心理学の分野では、臨床体験も豊富な事例に接する機会が極めて少なく、研究対象や方法も限られている。この中で本論文の独創的な視点は、NICUでのLBWIの母親の不安心理に着目し、MESCL作成を案出し、それを通してステージごとのLBWIの母親の不安内容や特徴を検討し、さらに不安変遷と不安発生機序を抽出した点である。

この検討は、本邦では初めてであり、ましてプロスペクティブな観点からこの点を論じたものは、ここ五〇年の国内外でのLBWIの母親への支援研究としてはまさに初めてであり、その有用性にまで進めて論じている点は、博士論文として大いに評価できる。また臨床支援に明日からでも活用できる点、臨床心理学的研究としても質の高いものである。

本論文のコメントを終える前に、一言添えるならば、本論文に関連し、印刷刊行された論文としては、査読のある学会誌への投稿論文は二本（二〇〇二年 低出生体重

児とその母親の不安―客観的指標（母親の体験段階チエツクリスト）による検討から― 日本新生児学会雑誌 三八 五〇六―五一二。二〇〇三年 乳幼児―養育者の関係性の総合的評価法について 児童青年精神医学とその近接領域 四四 二九三―三〇四）があり、さらに、専修大学心理教育相談室年報に五年間に渡って五本の文献展望研究をまとめている。

以上の諸点を考えてみると、今後臨床心理学の分野での実践及び理論研究を充分にこなし、独り立ちした臨床心理士及び臨床心理学の研究者として期待することが出来ると判断できる。よって本論文は課程博士の学位を与えるに値するものと認める。

Ⅲ 学位授与要記

- 一、氏名・本籍 井上美鈴（兵庫県）
- 二、学位の種類 博士（心理学）
- 三、学位記番号 博心甲第三号
- 四、学位授与の条件 学位規則第四条第一項該当
- 五、学位授与年月日 平成十八年三月二十二日
- 六、学位論文題目 低出生体重児の母親に関する臨床心理学的研究

七、審査委員

- | | | | |
|----|-----------|----|----|
| 主査 | 専修大学文学部教授 | 乾 | 吉佑 |
| 副査 | 専修大学文学部教授 | 吉田 | 弘道 |
| 副査 | 専修大学商学部教授 | 藤岡 | 新治 |